なんでもない言葉が

松野弘子

卓袱台の前に座った
母の口が動いている

こんもりと鉢に盛った
里芋の煮しめが
心なしか減っている

朝食の箸を並べながら
さりげなく声をかけると
急に口の動きが止まって
ぼんやりした顔になる
小さな背中が丸くなる

こんな時　ふと思い出す
私の幼なかった日々のことを

なにかひとつ出来るようになれば
ほめられ
ふたつ出来るようになれば
頭を撫でてくれた
温かく　ふっくらした掌

あんなふうに
たった　今
私にも何かないか

母のにっこりするような
母がほっこりするような

なんでもない言葉が——